

玄奘三蔵絵における打ち紙と卷子仕立ての表現の復元研究

菊池 円 (愛知県立芸術大学大学院)

1 研究目的

人物、動物、植物、山岳、建物と様々なモチーフが、肥瘦と濃淡のある墨線、色鮮やかで濃厚な色彩で異国の地を表現した描画表現と彩色技法、基底材である紙を加工して作られる打ち紙の表現効果、卷子仕立てによる絵巻特有の視覚効果を理解し、技法の習得を目的とする。

2 「玄奘三蔵絵」について

「玄奘三蔵絵」は鎌倉時代後期(13世紀末)に高階隆兼とその一門により制作されたと伝えられる、全十二巻七六段で構成された絵巻である。

全十二巻のうち、巻第一～九が生い立ち～天竺求法、巻第十～十二が長安での訳経事業～入滅までの、玄奘三蔵が法を求めインドに渡り仏典を広める一生涯が描かれている。

絵は前半と後半で筆使いや雰囲気の違いが感じられることから、巻第一～七を高階隆兼、巻第八～十二をその一門による共同作業で制作されたといわれ、詞書きは当時の書の名人である能書5人の筆によるものであるという。

3 「玄奘三蔵絵」巻第二第四段について

玄奘三蔵の旅の前半、水が尽き砂漠を進む途中、夢の中で現れた大神に促されるように進んで行く美しく水の豊かなオアシスに辿り着き、砂漠を抜けた先で胡国(中国北方の国)に到着し僧らに出会う場面である。

本研究ではモチーフの豊富さから、この場面を選び制作を行った。



4 基底材及び模写の制作

① 原本調査

本研究では、所蔵先の藤田美術館様のご好意により、原本の特別観覧をさせて頂いた。

原本調査の所見は、現状状態が非常に良く描かれた当初の姿を感じさせる姿であった。紙地の質は素晴らしく滑らかで艶やかに仕立てられており、絵具は非常に鮮やかであり、墨線も瑞々しさと

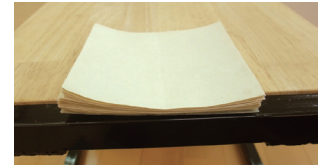
表情の豊かさが美しく、長い年月を経たことを感じさせない存在感を放っていた。また、力強さと共に細部まで丁寧に描き込まれており、高階隆兼の技術力の高さを感じた。

②基底材の準備

制作年代や原本調査での紙地の風合い、繊維の様子から楮紙を打ち締めた、打ち紙に描かれていると推測された。紙を打ち締めることで滑らかで美しい紙質や光沢、にじみ止めの効果を得ることができる。

(1) 紙を選ぶ

原本に近い紙の風合いを探るために、紙の厚みと産地を複数用意し実験を行った。最初に紙の厚みを1～9匁まで用意し、打ち締める比較実験をした。打った紙質に光沢感が足りなかったため数珠と御影石で表面を磨く工程を足した。毛羽立ちに気を付けていれば磨くことが可能であるということが分かった。最終的に、江洲製の厚口の楮紙が質、書き心地共に良いものだったので本紙に選んだ。



右半分が打ち締められ厚みが減っている

(2) 古色付け

現状模写のため古色付けとして、染料で染め付ける。

原本調査から胡桃6：矢車4で調合した染色液で染める。本紙が大きいため刷毛による引き染めをすることにした。染色後、色を定着させるための媒染をする。

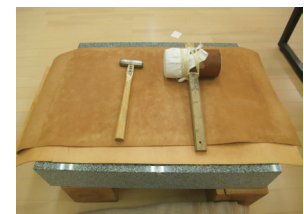
(3) 雲母胡粉引き

原本調査から雲母胡粉が引いてあることが分かったので、胡粉（飛切）8：雲母（6番）2の割合を布海苔で溶いたものが原本に近く感じた。本紙に刷毛で均一に調合した絵具を引く。

(4) 打ち締める

雲母引きと古色付けが終わった後に打ち締めて打ち紙にしていく。

本紙に必要な枚数の紙を用意し、噴霧器に水を入れ1枚おきに湿して重ね、全体を均一な湿り具合にするためビニール袋で包み一晩置く。次の日にビニール袋から取り出し湿り具合を確認後、牛革で上下から挟み、平らな御影石の上で木づちで打ち締めていく。最初は繊維が衝撃に弱いので優しく打ち、次第に強く打っていく。打ち加減にムラができないよう時折紙の並びを入れ替えながら紙の湿り気が完全に無くなるまで打つ。



げんのう、木づち、牛皮、御影石

打ち終わったら完全に乾燥するよう紙を広げて放置し、打ち紙の1日目が終わる。これをあと2日繰り返し、打ち紙の完成とした。

(5) 磨く

本紙を平板な板の上で、数珠、御影石を使い毛羽立ちに注意しながら磨く。

(6) 肌裏紙を裏打ちする（総裏紙）

今回は本紙の厚みがあるため、肌裏紙をそのまま総裏紙とする。肌裏紙は3匁の楮紙である。

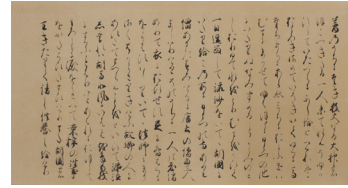
③絵の模写制作

まず墨線を描き、次にシワや亀裂、絵具による焼けの古色などを付けた。原本の絵具の鮮やかさを保つため、絵具の上からの古色付けを極力少なくするために、下地の段階で古色を多めに付けた。

絵具はまず広範囲を占める緑青と群青を塗っていった後、各モチーフへの彩色に移った。

④詞書きの模写制作

先に絵を制作したところ原本で感じられる、墨線が紙の上を瑞々しく滑るような表情が足りなかったため、詞書きの制作では硯ですった墨液に水の代わりに膠水を加えることで艶やかさを出し、紙に浸み込みにくく紙の上に乗しやすい質感を持たせた。



5 装潢の制作

①見返し

模写をした場面は巻第二第四段だが、絵巻に仕立てるために巻第二の巻頭にある見返しを復元模写し、本研究の見返しにすることにした。原本調査では、描かれている図案を確認できるものの紙地の痛みが非常に激しかったため、今回は見返しを装潢の一部と考え、復元模写をすることにした。



風に揺れるしなやかな藤の枝葉を青味のある金泥で、花を銀泥で描いてあり、藤の流れを感じ、理解しながら復元案を決める。

藤という図案は制作背景と関係していると推測される。「玄奘三蔵絵」は同じく高階隆兼が描いた「春日権現験記絵」と作品寸法、作風、図案などが極めて近似していること、藤原氏の氏社である春日大社に伝えられている「春日権現験記絵」に対して「玄奘三蔵絵」は藤原家の氏寺である興福寺に伝わったということから、藤の図案は自然であろう。作中にも藤は多く登場してくる。

見返しの本紙は、絵や詞書きの本紙とは明らかに違う紙であり、紙質や風合いから薄手の混合紙(雁皮+楮)を選び、染色の後、補強に極薄の楮紙で裏打ちをした。

原本調査を参考に、枝と葉は三步色と水金を混色した青味の金泥で、花とぼかしを純銀泥で描いた。青味の金泥であることで、銀泥との調和が美しいものとなっていた。この金泥の色幅は、本紙の絵の部分でも見ることができる。

②表紙

文献によると原本の表紙裂は宝相華文の紫色の綾裂であると記されているが、原本調査で観察したところ、痛みが激しく柄と色を明確に確認することができなかった。今回の研究では表紙も見返しと同様に装潢の一部として想定復元することにした。

(1) 裂

原本の文様とされる宝相華は空想の植物であり、その構成要素の一部とされる牡丹文の廣瀬製綾裂を本研究では使用した。牡丹文でありながら葉と茎のある図柄が宝相華文を感じさせること、大きさ、形、雰囲気などから本作品に合っていると判断し決定した。

(2) 染色

選んだ綾裂は無染色の白地であったため、紫色に染めることにした。紫色の染料はムラサキという植物の根である紫根を、白でお湯と杵を使い抽出液を得ていた。本研究では、紫根の抽出液が熱に弱いため、安定した色を得られるアルコール抽出を行い、媒染は生明礬のアルミ媒染を選んだ。



染色の手順は、まず染色液の定着を良くするために生明礬による先媒染、次に染色、最後に媒染で色素を定着させた。

③ 装潢

原本と同様の卷子仕立てとした。

(1) 表紙と見返し

表紙は染色した裂の風合いを崩さないよう、裏打ちの楮紙も紫根で染め、裏打ちを行った。

表紙と見返しは裏表の関係になるので貼り合わせ、八双を取り付ける。

(2) 本紙

詞書き、絵、軸巻と分かれていた本紙を全て継ぎ、紙の余分を切断する。

(3) 軸

原本の軸先は紫檀であり、剥落して図柄はわからないが螺鈿細工の痕跡がある。原本の風合いを加味し、黒檀の模様の無いシンプルなデザインのものを使用した。軸径は痛み防止に一般的な卷子よりも太めの八分幅のものにした。

軸先を軸に取り付けた後、軸巻きに取り付けた。



(4) 卷緒

原本の卷緒はオリジナルが現存しておらず、後世の修理により取り付けられている。本研究では作品の雰囲気から考察し、萌黄色、茶色、黄色、濃い紫、薄い紫で織られた緒を選んだ。作中にも登場する藤の花や葉を連想させる爽やかな色彩の紐である。表紙部分の八双に取り付ける。



(5) 表紙部分と本紙部分を継ぐ

最後に表紙部分と本紙部分を継ぎ、完成となる。

6 まとめ

この研究で大きかったのはやはり打ち紙であった。原本調査で観察された絵画表現は打ち紙でないと表現できないだろうと研究していくほど感じた。特に墨が紙の表面を滑るような瑞々しい表情は通常の楮紙には困難なものである。雁皮紙も密度が高く滑らかな質ではあるが、楮の打ち紙の深みのある表情と墨の対比でこそ原本の美しさに近いと感じた。絵や詞書きの質の良さだけでなく、基底材も含めた表現であり、紙と墨の瑞々しさと濃厚な色彩が見事に調和した美しい作品であった。

また、卷子に仕立てたことによる視覚効果も良かった。展示する場では絵巻本体を固定してしまうが、実際巻き取りながら見る時、場面の広がりを感じることができた。土坡の曲線が現れてくる様は地面が波打ち、生物が動いているような躍動感を得ることができた。

紙、絵具、表具の形の全てがお互いを引き立てあい、魅力的な作品へと導いてくれる様は最初に期待していた以上の収穫があった。

<参考文献・図版出典>小松茂美 『続日本絵巻大成7 玄奘三蔵絵 上』 中央公論社 1981年 / 小松茂美 『続日本絵巻大成8 玄奘三蔵絵 中』 中央公論社 1982年 / 小松茂美・中野玄三・島谷弘幸 『続日本絵巻大成9 玄奘三蔵絵 下』 中央公論社 1982年 / 奈良国立博物館・朝日新聞社 『天竺へ 三蔵法師3万キロの旅』 奈良国立博物館 2011年 / 宮内庁三の丸尚蔵館 『春日権現験記絵：修理事業報告書』 宮内庁 2012年 / 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室 『図解 日本画用語辞典』 東京美術 2007年 / 高橋良孝 『原寸大 花と葉でわかる山野草図鑑』 成美堂書店 2007年 / 「紫根 植物名：ムラサキ、英名：MURASAKI - アースネットワーク」 www.earthnetwork.info/modules/blog5/b-5//shikon-some.set1.pdf